

「2019年香港中文大学サマースクール（中国語コース）派遣参加報告書」

京都大学薬学部2年 花田 毅己

①学習成果について

今回の派遣プログラムに参加することで、中国語のレベルが向上した。基本的な日常会話、例えば「あなたは名歳ですか?」という質問に答えられなかった状態から、特定のトピックについて中国語で1分程度しゃべることが出来るようになった。私は中国語を第二外国語として1年学習しているが、全く会話らしい会話が出来なかった。これを考えればこれは大きな進歩である。加えて、日本全国の中国語の学習に熱心な学生たちと触れ合うことで、中国語を学ぶモチベーションも向上した。他の参加者のようにHSK5級を受験するつもりである。

②海外での経験

授業外の海外経験活動としては3つ挙げられる。1つ目は授業後に様々な町に繰り出すこと、2つ目は土曜日にプログラムのツアーとして観光地を巡ること、3つ目は京都大学の同窓生のシュウ先生の学生とプレゼンテーションを通じた交流をすることである。この3つを通して感じたことが1つある。それは、イギリスによる統治の影響が未だ色濃く残っているということである。1945年ごろからあるレストランでは漢字ではなく英語でメニューがかかれていたり、セントラルの街を橋の上から見下ろした光景がイギリスの街の風景に似ていたりするのである。また、香港がイギリスの統治下にあった影響で資本主義、表現の自由が保障されていることが分かった。シュウ先生の学生との対話では、香港がそうした資本主義的で自由な場所であることに誇りを持っていること、それを守るために国民の多くが抵抗していることが伝わってきた。香港人が日本人である僕からするとかなり真剣にデモをやっているのも、ここに起因するのではないだろうか?また、日本におけるデモについて学生から聞かれて初めて、日本におけるデモのイメージが過去の過激派による事件が原因で「過激」、「危険」といったものであることに気が付いた。香港の統治の影響のように、現在の日本の傾向が歴史上のどの出来事に起因するのか考えて、他の国と比較してみることも、他国の人と政治などの話をするネタとなるのではないだろうか。

③プログラム内容

平日の合計14日間で中国語の授業を行う。レベルは5つに分かれており、上のレベルでは中国語による授業を、下のレベルでは英語による授業を行う。私は下から2つ目のレベルでの授業を受けたためほとんど授業は英語で行われた。ピンイン、最低限の中国語単語、最低限の文法を習得している者を対象とし、授業内容としては京都大学1年次の授業範囲の8割を網羅するほどだと思われる。午前は文法メインの授業を、午後はスピーキングメインの授業が行われる。

特筆すべきは会話量の多さであろう。京都大学では主に紙やパソコンを通じた文法事項及び単語の習得に重きが置かれているが、香港中文大学では会話を通じた文法事項の習得に重きが置かれている。例えば、先生が生徒に中国語の質問をしてそれにこたえるのはもちろんのこと、ヘッドフォン越しに生徒同士を中国語で会話させたり、同じ文構造で単語を少し入れ替えた文を何度も読ませたりする。このプログラムでは一つの文法事項に対するスピーキングによる反復量が非常に多いのである。そのため授業後は（非常に疲れるものの）その文法事項を使った文をスラスラと話せるようになっている。

④進路への影響

正直なところ自分の進路は薬学系であり、その進路（薬剤師、研究者、弁理士など）に進もうと考えているため進路に影響はない。しかしながら、海外経験活動の中で香港の学生の優秀さ（日本語と英語と中国語のトリリンガル）、プレゼンテーションの中で見えた学業に対する熱意を目にしたことで、「英語にプラスして中国語が出来ればなんとかなるだろう」という漠然と心にあった甘えが砕かれた。国際社会で活躍するうえで+αを作るだけでなく、自分の分野に関する誰にも負けぬ知識、知恵が必要だと痛感した。そのため、これからはさらに日々の勉強に邁進していこうと思う。